
戦場の鎮魂歌

猿道 忠之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場の鎮魂歌

【Nコード】

N7427Y

【作者名】

猿道 忠之

【あらすじ】

広大なバストニア大陸、文化の異なる大小様々な国々がひしめき合い、幾度となく繰り返される戦乱。その中の一国、グイディシユ王国に、隣国のユストニア公国が鉱物資源の豊富なレルジアント地方に向けて進攻を開始した。

初戦を電撃的な勝利を重ね、高原地帯を駆け抜けたユストニア軍は、遂に平原へと戦いの場を移す。だが、そこで待っていたものは、補給を無視した総力戦による大敗北であった。

平原での戦いに敗北したユストニア軍は、確実な地盤を築くため

に再び高原地帯の未占領地の完全制圧へと乗り出していく……。

平原での戦いである初戦を勝利で飾ったグイディッシュ王国軍の第六近衛師団所属の新任大隊長リオデ・J・ネイドは、大隊の新たな任務を命じられる。それは高原地帯で孤立した残存守備部隊の救出であった。

リオデはこの戦争の早期決着という志と、ある目的と想いを抱いて、東部・中央統合軍司令部の命令の下、高原地帯の戦地へと向かうのだが……。

第一章 決断の時？

プロローグ

空は澄みきつた青一色で染め上げられ、地表を覆う雪は、真上から照らされる太陽の光をきらきらと反射していた。

高地を覆う雪は雨期の手前にならなければ、溶けはしない。

お粗末ではあるが気密性の高いレンガ造りの家々が、道を挟んで建ち並んでいた。

太陽から降り注ぐ熱で溶け出した雪は、冷えきつた夜に屋根の端で氷柱に姿を変えていく。その小ささまざまな氷柱は、家々の屋根にこびり付き、離れようとはしない。

そんな中、村の少女は両手を広げて一人歩いていた。

「こんなに綺麗な青空、ひさしぶり」

ついそんな独り言を放ってしまうほど、ここ最近太陽と言うものを拝んではいなかった。曇り空ばかりで少女も飽き飽きしていた。春先の今はただやることなく、家畜のヤギと戯れることくらいが、村人の暇つぶしとなる。村の外にすることはなく、外界からは一切情報が入ってこない。

春の終りから秋と短い期間で農作物を育ててはならない農民達の生活は、けして楽なものとはいきれない。

だが、今は特にやる事はない。一時の休息、それが冬からこの春の期間なのだ。

「今はこんな風にするのが一番かな」

白い息と一緒に言葉を吐きながら、少女は青空を眺めた。

まだもう暫くはこんな暇な時間が過ぎてゆくが、いずれはこの雪は溶けてまたいつかは過酷な農作業に従事するのだ。

それもこれも全ては少女や村人たちが生きるために、必要なこと。村の端まで歩き終えた少女は、腕を空に向かい伸ばし背伸びをし

た。

「ん、あれは？」

背伸びをする少女の目には、何かの群れがこの道に対して垂直に
一列に並んでいるのが映っていた。遙か向うの丘の上、その統制さ
れた動きは野生の動物の動きではない。

少女は目を凝らして、その何かの群れを見続けた。

「何かな……」

丘の上から、白い雲の塊がゆつくりと現れ、その丘を影で覆う。

それと同時にその何かの群れは、横一列の隊形を維持したまま丘を
駆け出した。

「あれって……」

少女は立ち止まっていたが、事態を飲み込んだ瞬間にその場を走
り出した。まるで何かに脅えるようにして……。

決断の時？

大隊の初戦を勝利に導いた隊の長、リオデ・J・ネイドは、高原
に通じる道を前進していた。隊の錬度は確実に上がっている。

岩と雪しかないこの険しい山道も、恐鳥であるグイと呼ばれる鳥
を用いれば、容易に山越えができる。

もともと高地にしか生息していなかったこの鳥は、体高はヒトよ
り頭三つ分高い大きい鳥だ。黒い羽毛に身を包み、大きな黄色い嘴
は、鉄の鎧をも噛み砕く。強靱な足はありとあらゆる道を走り抜け
るだけの逞しさをもつ。

そして何よりも一番の強みは、哺乳類にはない肺の器官の一部で
ある気のうを持っており、高地でも長距離を走り続ける事ができる
ことだ。馬では酸欠を起こしかねない高地でさえ、平気で走り続け
る事ができるのは、この鳥の特権である。

国土の約六〇パーセントが高地のグイディシュ王国には、グイは戦略的に見ても、とても貴重で強大な戦力となる。

そんなグイは主人の操るとおりに足を進め続ける。

「リオデ大隊長、斥候隊の報告が入っております」

リオデの補佐を勤めるティオ・マラドスがその銀色の髪の毛を、鬱陶しそうに首を振って掻き分けて彼女に言った。

「報告？」

彼女は怪訝そうな表情を浮かべ、ティオを問いたです。

「はい」

「何かあったの？」

「この先に道の分岐点があると報告してきております」

この報を聞いたリオデは、顎に手をやり考え込んだ。

現在の目的は、国境を越えてレジルアントの高地に侵入したユストニア軍に包囲され、孤立している王国軍第1112山岳歩兵旅団所属の歩兵一個大隊の救出である。

だが、リオデの部隊のおかれた状況は芳しくない。現地のガイドがいるわけでもなく、何より、自らの隊の正確な位置さえ手探りで探さなければならぬ状況なのである。

「ティオ、隊を二分して中隊にする。お前が一隊を率いて私とは反対の道に向かえ」

当然と言えば当然の結果なのかもしれない。

部隊を半分に分けて索敵能力をあげるが、代わりに戦闘能力の低下は免れない。

今現在の状況を考えれば、それが最も確かな判断である。

ガイドもなしに目的地に辿りつくことは、不可能ではないが相應の困難が伴う。

第一に救出する部隊の位置も大まかにしか把握をしていない。

「一個の中隊の編制は四個騎兵小隊、二個歩兵小隊、装甲兵、銃兵をそれぞれ一個小隊だ」

「は、すぐに再編成を伝達します」

リオデは考えをまとめて、すばやく行動に移した。

この行動力こそ彼女の魅力であり、指揮官として見習われるところなのだ。

山中で長い蛇のような隊列が足をとめ、再編成を伝達する。

ものの数分で規則正しく並んでいた隊列は、バラバラに崩れて形をなくしていく。

「一刻も早くこの戦いを終わらせなくては……」

兵士それぞれが上の命令で部隊を区分されていくさまを、リオデは眺めながら呟いていた。その決意に満ちた目の内には、初戦で見せた悲しみが渦巻いていたのを、ティオは見逃さなかった。

ヘルメットからたれる赤く長い前髪から覗く青い目には、それがにじみ出ていた。

ユストニア大公国による突然のレルジアント地方の侵攻、それは二十年前の時とはかなり違っていた。このレルジアント地方には豊富な鉱物資源が埋蔵されていて、それを目的にユストニア公国は侵攻してきている。

ユストニア軍の兵力、戦況、どれをとっても前回行われたレルジアント戦争の時よりもユストニア軍が優勢だった。

王国軍守備隊は次々と撃破され、敗走を余儀なくされて、ついには山岳地帯全域をユストニア軍に占領されていた。

ユストニア軍はそこから更にレルジアントの深部に侵攻を開始し、山岳地帯の手前にあるタリボンの街を攻め落とそうと包囲していた。しかし、戦力を中央から増強したグイディシュ王国軍は、戦力を集中的にタリボンに向けて包囲を打ち破った。

主戦力をタリボンに投入していたユストニア軍は、一時的に撤退、態勢を整えてラネス平原での決戦を挑む。だが、延びきった補給線のせいで十分な状態にないまま、王国軍と決戦を迫られ、ユストニア軍は主戦力の殆どを失った。

ユストニア軍は散り散りに敗走し、パワーバランスは逆転し、山岳にてゲリラ戦を強いられることになる。何よりもユストニア軍は

侵攻スピードを上げるために、通り道にある主要都市しか占領しておらず、地方都市や小基地などは野放しとしている。

しかし、今現在その状況も変わりつつある。

ユストニア軍はタリボンの平原での敗走で、山岳地帯を完全に占領することに力を注ぎ始めたのだ。

総合的な兵力では優勢な王国軍だが、山岳地帯のみでのパワーバランスは明らかにユストニア軍が上だった。

そして、今もまだ山岳の地方守備隊はユストニア軍の猛攻を受けて疲弊していつている。

守備隊が持ちこたえられるのも時間の問題だ。

一刻も早くユストニア軍を王国領より追い出さなければならない。そのためには少なくとも、戦線を構築してユストニア軍主力の撃滅を確実なものにしなければならない。

しかし、ユストニア軍との間には明確な戦線は張り巡らされず、小隊規模のユストニア軍と斥候部隊が、山岳の斜面で小競り合いを繰り返す程度だ。戦況はこう着状態にある。

その状況を打開すべく、リオデの大隊がこの山岳地帯に投入された。大隊規模での山岳地帯進入はリオデの部隊が初めてとなる。

「隊長、隊の再編成完了しました」

ティオは彼女に対して、報告すると彼女はやりわりと答える。

「ご苦労、斥候の報告では南西に続く道と南東に続く道があったのだな？」

ティオにそう確認すると、「はい」という元気の良い返事をする。彼女は少し考えてから、ティオに命令する。

「私の隊は南西に続く道に向かう、ティオは南東の道に向かえ」

ティオはその言葉に小さく返事をし、率いる部隊に指示をだした。その目に迷いはなく、指揮官らしく顔付きも引き締まっている。

だが、リオデにはそれが表面的なものと分かっていた。彼は実戦を経験して間もない部隊を率いているのだ。

いくら錬度が高くても、経験を積み重ねた隊にはとても勝ち目は

ない。

もし、ユストニア軍の大部隊にでも遭遇したものであれば、最悪の事態に陥る可能性も少なくはない。恐怖と言いい知れぬ不安が彼らを襲っている。

顔には決して出さないが、兵士達の出す雰囲気でリオデには全てが読み取れていた。

「全部隊、進め！」

気迫のある号令でリオデは兵士達に命令した。

まるで兵士達を激励するかのように……。

第一章 決断の時？

？

「リオデ隊長！ 村です」

一人の兵士が指を差して叫ぶ。リオデは指の指した方向に顔を向ける。その方角には道の脇に立ち並ぶ家屋が見えた。

道を挟むようにして家屋立ち並んでいるが、丘の上からでは村の中まで見渡すことはできない。

「斥候隊を編成する。騎兵分隊は私の分隊に合流して村に向かう」

「隊長危険です。敵が占領している可能性があります」

そばに付いていた階級の高い兵士のベルシアが、慌ててリオデを止めた。

しかし、彼女自身、自らの目で確認しなければ気がすまない性の人間である。

「敵がいれば既に我々を発見しているはずだ。先手を取られていると考えて行動すれば、どうにかなる」

ベルシアの忠告も聞き入れず、リオデはヘルメットを深く被り、ランスを握り締めていた。戦闘体勢は万全でいつでも出撃はできる。リオデの様子を見てベルシアはあきれ果てた後、全隊に戦闘隊形をとるように下命した。

全ては彼女に何かがあつてはいけないという心遣いと、もしもの時に即座に対応するためである。

ベルシアの命令で銃兵隊は村に対して横列陣を作り、チャンバーに弾をこめた。これを使わない事を祈りつつ二列になり、一画を斥候隊が出られるように開ける。

その間をリオデ達が駆け抜けていった。

着々と戦闘隊形に移行していく隊は、一糸乱れぬ動きを見せている。普段の訓練と指揮系統が整備されているからこそその賜物ともいえる。

一気に迫り来る村にリオデは目を見開いて、歯を食い縛っていた。グイのスピードではなく、そこに見えたモノに対してだ。

「戦線がないってのは、本当みたいね……」

リオデはそう呟いて村の前に立つカーキ色の軍服を身につけた兵士を見つめた。

彼女らを発見した兵士は、慌てて村の方へと駆けていく。

「隊長！ あの村は……」

「分かっている！ すぐに撤退したいけど、相手の戦力を見極める事に意味があるのよ」

リオデの言葉に戸惑いつつも、横についていた兵士は、手に収まるランスの柄を握り締めた。彼女自身村に突入をするような真似はしないつもりでいる。だが、それも時と場合を選ばなければならぬ。

占領された村にたった一五騎で突入したところで、結果は見えている。

だが、今のような状況では別だ。

村の家屋は道を挟むようにあり、敵の正確な数は分からない。その上、村の家屋の細かな配置を知っているのと、知らないのでは後の戦闘で効果は大きく違ってくる。何よりも彼女を突入に駆り立てたのは、敵兵士の配置がおかしかったからだ。

ユストニア兵の歩哨の配置は、村の入り口に一人だけと言うものだった。

普通なら最低でも2人を歩哨に立たせて、その後ろに戦闘要員を十名は配置して、奇襲に備えておくものだ。戦時ならばなおさらのことなのだが、村の入り口にはたった一人しか兵士が配置されていない。

（何かがおかしい……）

リオデはそう思いつつ先頭に出て行き、三個分隊を先導し、村の中に入り込んでいった。

村の道には数名のユストニア兵が、鎧も着けずに剣を持って闊歩していた。

その兵士を標的としてとらえたリオデは、急速に接近しランスの刃を突き立てる。

呆氣にとられたまま横たえるユストニア兵、その側にいた兵士も次々と悲鳴を上げる間もなく倒される。

リオデ達は周囲を見渡して、村の道を制圧したことを確認する。

村の家屋は約70戸ほど、道には馬が繋がれてはいるものの、兵士の姿は確認できない。

村にユストニア軍が駐留しているのは確かだが、肝心のユストニア軍の兵士が見当たらないのだ。

しかし、あまり長居をすると、命をとられかねない。

「よし、村の配置も掴んだ。撤収！」

力強い口調でリオデは分隊の人間に言い聞かせる。

その姿に女を感じるものはおらず、素直に従って来た道を戻りだした。

最後尾を勤めているのは、もちろんリオデだ。

彼女は規格を逸脱した指揮官である。部隊の最高指揮官でありながら、戦場の第一線に常に立ち兵士達を先導する。そのためか、当初、隊では不思議がる兵士達で溢れていた。

しかし、彼女の真直ぐな戦いにかける思いと部下達への気遣いを汲み取って、今では指揮官として信頼されている。

若い女性でありながら指揮官でいられるのは、そのおかげといえる。

リオデ達の帰りを待っていた中隊は、村から無事に帰還する一行を見て安堵の溜息をついていた。

「すぐにでも突入体制をとっておけ、ケイルは銃兵3個分隊を連れて村の西側に回れ。本隊が射撃を開始したらそれが合図だ。村から

出たユストニア軍兵士を撃って撃ちまくれ」

ベルシアは命令を下し、そして素早く隊形を村の地形に合うように配置していく。

そして銃兵隊の縦列を前にベルシアは腰にあったサーベルを抜いた。

それと同時にリオデ達斥候部隊も中隊に帰還する。

「あんまり冷汗をかかせないでほしいもんですな」

帰還してきたリオデにベルシアは一言声をかけると、彼女はヘルメットを脱いで笑みを浮かべていた。

「指揮官が前に出なくちゃ、誰もついて来てはくれないわ」

ベルシアに見せた笑顔は、とても爽やかなものであった。しかし、それが彼女の一時的に緊張から解き放たれ、また、すぐに緊張状態に入らなければならぬものであることを、ベルシアは理解していた。

「ケイル達を村の西に配置しました。必要とあれば騎兵隊も一個小隊ばかり配置しておきますが、どうします？」

「そうね。頼むわ」

即決したリオデに、ベルシアは騎兵隊の小隊長に村の西側に移動するように命令を下す。

「敵の様子はどうです？ 見た感じでは大したことなさそうですが」
ベルシアの問いにリオデは真顔になって答える。

「村で歩哨を立ててはいたけど、おかしいことに敵が殆んど村に見当たらなかった」

怪訝な表情を浮かべるベルシアは、リオデにきいた。

「敵の数はそんなに多くないってことですかね？」

「そうなるだろうね……」

リオデはそういつて西側に配置についた部隊を見てから、ベルシアに言う。

「攻撃を開始するわ」

リオデはそう言うなり、整然と並んでいる部下たちの前を、ノヘ

ルメットを抱えたまま颯爽とグイで駆けていく。そして、部隊の隊列中央前に来ると、グイの手綱を引いて、立ち止まる。

その堂々たる勇姿と、戦場に似つかわしくない美しい容姿を、部下たちは息を飲んで見守っていた。

「皆聞け！ 敵ユストニア軍の一団があのか村を占拠している。諸君らの同胞が、あの村では助けを待っている。心してかれ！」

リオデはその場でサーベルを抜いて、そのサーベルを雲に届かばかりに振り上げる。それと同時に兵士達の雄叫びが、雪原の広がる丘陵地帯に響き渡った。

リオデは銃兵隊の後ろに待機している騎兵隊の方へとグイを進めた。

それを見てベルシアはサーベルを抜いて、横列隊系をとる銃兵隊の横に出た。

「射撃用意！」

ベルシアは声高らかに叫ぶ。すると横列の銃兵隊の前列に位置する兵士達は膝を付いて長銃を前に構えた。

後列はその後ろで、直立姿勢のまま銃を突き出している。

「威嚇射撃の後、すぐに騎兵隊で突入する。騎兵隊は私に続け！」
リオデの一言にベルシアは目で銃兵隊の横列を確認した。

ベルシアはサーベルを空に向かって振り上げる。

「構え！」

ベルシアの声に一齐に銃兵達は銃を構える。かちやかちやという銃とスリングを繋ぐ金具の音が響き、緊張感が高まる。

「撃て！」

ベルシアは大きな声を発して、サーベルを振り下ろす。

白色の発砲煙が一齐に舞い上がり、それと共に硝煙の匂いが立ち込める。

「次弾装填、構え」

ベルシアの声でボルト式の銃から、一齐に空薬莖が地面に転がっていく。

そして、再び銃兵達は銃を構えて村に向かって銃を構える。

「撃て！」

轟音が雪原を覆い、その行為が二度、三度と、間を置かずに繰り返された。

「全部隊、突撃用意！ 銃兵隊は着剣！」

威嚇射撃を終えた銃兵隊は、ベルシアの号令で小銃に銃剣を装着する。

「騎兵隊の突撃を優先させろ！ ベルシア！」

リオデの怒号が響き、ベルシアはすぐに命令を下す。

「銃兵隊は、騎兵隊に道を開ける！」

騎兵隊の前に展開する銃兵隊が道をはけて、騎兵隊が突撃するには十分な幅を開ける。

そこでリオデは大声で叫んだ。

「騎兵隊は私に続け！」

リオデは勢いよくグイの胸元に蹴りを入れて、全力でその場からグイを駆けださせた。

高原を覆う雪は馬の蹄により抉り取られ、茶色の地面が肌蹴っていた。

その上を恐鳥達が縦列を維持して土埃を蹴り上げて疾走していく。白い雲が空を覆い、雲の影の下となるこの薄暗い高原は荒れ果て、大地を露呈させていた。騎兵達はその大地の上を、ランスを片手にグイにまたがり疾走していく。

黒い羽毛を全身にまとい、主人の騎手を乗せ全力で走るグイ達は、黄色い嘴を前に突き出して村に向かう。

村の入口付近で数名のユストニア兵が、弓で騎兵たちに応射してきている。先ほどの奇襲に気付いた者なのだろう。

放たれた矢は無情にも、リオデ達のはるか手前で地に吸い込まれていた。

リオデには最後の抵抗にしてはあまりにも虚しすぎるように感じられた。だが、感傷に浸っている暇はない。

村の玄関口である農具を収める小さな家屋が、騎兵隊の目の前で迫ってきていた。

リオデの眼前にはユストニア軍の歩兵が、チェーンのついたメイスを振るい、待ち受けている。

彼女は手に持つ鋭く尖った矛先を、皮とチェーンで編まれたレジストを着るユストニア軍兵士に向ける。

怯むことなく兵士はメイスを振るって走ってくるが、武器のリーチは騎兵隊のランスには及ばない。

ランスの刃がユストニア軍の兵士を貫き、その場に彼を這い蹲らせた。

その上を騎兵達は容赦なく踏みつけて走り抜けていく。

小屋の横を通りすぎ、騎兵達は雄叫びをあげながら、一斉に村へと雪崩れ込む。

高原ではありふれた村の形、道沿いに家屋が並び、外れた場所に教会がたっている。

この形態の村が騎兵隊には地獄に向かわせることを連想させた。

家屋からはこちらの姿が丸見えだが、こちらからは相手を目視する事は限りなく困難な作業となるのだ。それによって発生するのが待ち伏せである。

だが、この村ではその心配がなかった。

先ほどの偵察の結果とあわせ、村の家屋からは装備の整っていない兵士が大慌てで走って出てきていたのだ。

奇襲をかけられ、うろたえているさまがリオデ達には手に取るようにわかった。

剣を握る事すらせずに逃げ惑うユストニア兵達を、後ろからランスで突き刺す事はいとたやすい事だ。

村の中をまるで家畜でも殺すかのように、騎兵たちは次々とユストニア兵を突き殺していく。決着はあっさりとした。

ものの数分で、家屋からは逃げ遅れたユストニア兵が、戦意を喪失し肩を落として出てくる。しかし、降伏をしたわけでもない。何

より相手は兵士である。

容赦なく騎兵達は彼らに槍を突き立てた。

その地獄のような光景を目の当たりにして、ようやく敵兵士達は降伏を表し、両手を上げる。数十名のユストニア兵の死体が道に転がり、その凄惨たる状況をものがたっていた。

力なく横たわる兵士達の中には、瀕死の者もいるが、今は構ってはいられない。

「被害報告！」

リオデは決着がついたと見ると素早く部下に命令する。

「報告！ こちらの被害はなし！ 引き続き村の中の掃討に移行します」

部下の声にゆっくりと頷くと、リオデはグイより地面に降り立った。

辺りに響き渡る音はユストニア兵のうめき声と、王国軍兵士の、味気ない勝利に対する落胆の溜息だけだった。

リオデはグイをおりて改めて周りを見回す。

レンガと木を組み合わせて作られたお粗末な家、屋根には藁わら葺ぶきが被せられ、ここが農村ということを感じ起こさせられる。

そんな家々が山道を挟み、立ち並んでいる。

リオデはその山道の真ん中で、疑問を抱いていた。

ここに突入してから、村の人間が全く見当たらないのだ。

嫌な予感が彼女の頭を過ぎては消えていく。

彼女はいても立ってもいられずに、部下にグイの手綱を渡して、身の危険を顧みず目の前の家屋に足を進めた。

目の前の一軒の家は、ユストニア兵が服さえ着ずに飛び出てきた家屋である。

それがどうしても彼女の頭を離れずにいた。

なぜ兵士が剣も鎧も着ずに下着、しかも裸に近い格好で飛び出してきたのか、疑問が残る。今は昼下がりで、それ故に休憩をとるにしても、少なくとも装備は整っているはずである。リオデは一抹の

不安を抱きながら一歩家に足を踏み入れた。

その瞬間に彼女の背筋に寒気が走った。

嫌な空気が彼女の鼻と肌を通して漂ってきたのだ。

かつて経験しことがないような異様な空気を漂わせるこの家は、彼女の予感が当たっていた事を証明することになる。

一歩、また一歩と足を踏み入れるにつれて、血生臭さが濃くなつてゆく。

決して広くはない家、何室かに区分けされた防寒には強い家の一室、そこに足が吸い寄せられるように歩みだす。

リオデの中で誰かが呼びかける「開けてはだめ」と、しかし彼女は腰のサーベルの柄を握り締め、そのドアノブに手をかけた。

決して開けてはならない箱、それをリオデは開けた。

部屋の中には老夫婦と中年夫婦、そしてその子供と思われる少年が、服をひん剥かれ、どす黒い赤色に染まり、倒れていた。

薄暗い部屋は血で染まり、小さな窓からわずかに洩れ出る光を、その血で濡れた床は鈍く反射していた。

慈悲という言葉がないというのを、この時ほど彼女は思い知らされた事はなかった。老若男女、この家に住んでいたと思われる住人は殺害されていたのだ。

子供であろうと容赦はなく、転がる村人の死体は服を剥ぎ取られた上に、両手両足を縛られ、自由を奪われたうえで殺されている。

体のあちらこちらにあざが残り、無造作に重なれた死体に、安堵の表情などはない。

苦しみに満ちた表情のまま、放置されているのだ。

死後それほどに時間はたっていない。

吐き気と共に怒り、憎しみ、悔しさ、悲しさ、そして苦しさが同時にリオデの胸の内には沸きあがり、全てをその場に吐き捨てたくなった。

「酷い、酷すぎる。あんまりよ……」

リオデの中で様々な感情が渦巻き、出す言葉がなくなる。

彼女はその部屋に背を向けて、頭を押さえながら歩き出した。

だが、完全に探索し終わった訳ではないことを思い出し、彼女は正気を取り戻して再び残りの部屋にも足を踏み入れた。

そう広くはない一室にはまだ温かい食事が用意され、もう一室は生活感のない薄暗い寝室が息を潜めていた。

どの部屋にも異常はないようにも見える。

だが、リオデが薄暗い寝室のドアを閉めようとしたとき、部屋の奥で何かの物音がした。

何か硬いものが、ゆつくりと木の板を静かに叩く音、その僅かな音を聞き逃さずに、リオデは音の方に振り向き、素早く身構えた。

ユストニア兵が自分の近くに潜んでいる。そう直感的に感じたのも束の間、ベッドの横の陰から何かが飛び出てきた。

それを予期していたリオデは、目の前までせまる鈍く光る刃と人の影を確認した。

身をかわずことなく、その刃が握られている腕をとり腹部に刃が刺さる前で受け止める。

その時には既に互いの顔を視認できる距離になり、もみ合いとなっていた。

相手は男のユストニア人、鍛えられているとはいえリオデも女性であり、なおかつ、華奢な体つき、揉みあいとなれば力ではどう足掻いても敵わない。

当然のごとくリオデは力負けし、ユストニア兵の力で押し倒される。

彼女は凄味をきかせて睨み付けるが、男は表情を変えることなく刃を持つ腕に力を入れていく。

リオデの右腕が床に着き、足で押さえられた時に男の刃は止まり、あいたもう一方の手で、彼女の両腕を床につけるようにしていた。

男はリオデの上に馬乗りになり、両腕を右手で押さえつけて自由を完全に奪った。

「ほほう、これが噂の女士官か……」

今まで表情一つ変えなかった男は、不気味な笑みを浮かべた。
意味深に唸り、そして言ったのだ。

「女士官か……」と。

男の手に力が入り、リオデの両手首を圧迫し、彼女の表情を徐々に歪ませていく。

その表情の変わりようを、男は笑みを浮かべて見つめている。

「この豚野郎」

睨みを効かせてリオデは言うが、今の体勢では男を喜ばせているに過ぎなかった。

「どうしてやろうか……」

ニヤつく男は短刀を、リオデの首筋を沿わせて、こわばるリオデの表情と反応を楽しんでいた。

「そうやって、この家の住人も殺していったの？」

彼女の言葉に男は一瞬動きを止めたが、すぐに笑みを取り戻して言った。

「そうだな。家族一人一人を、娘の目の前で殺していったさ、両親は悶えて死ぬ直前まで懇願していたよ、子どもだけは助けてくれ……とな」

それを聞いた瞬間に、リオデの全身に鳥肌が走っていた。

「この下衆野郎！」

部屋に響き渡るリオデの声は、殺気と怒気を帯びていた。

今彼女の目の前にいる男は、この惨劇を引き起こした張本人なのだ。

リオデの内に憤怒がこみ上げてくるが、この状態ではどうする事もできない。

彼女はそれを思うと余計に腹痒く、どうしてもこの男だけは自分の手で殺したいという思いが胸の内から湧き出してきた。

そのせいか、彼女の表情は険しくなり、睨みつける目にも殺気が帯びてくる。この状況に男は満足しているらしく、満面の笑みを浮かべていた。

しかし、このような状況も長くは続かなかった。

突如、男の隠れていた所から、女性の悲鳴にも似た奇声が発せられたのだ。

男はそれに驚き、後ろを振り向こうとしたが、それよりも早くに男の頭が何かで殴られ、衝撃で揺らいでいた。

力を失って、男はリオデの方に倒れ込んでくる。彼女はそれを、自由になった腕で素早く支え、乱暴に押しのける。

男をのけてリオデの視界に入っただのは、肩を大きく上下させて息をし、手に陶器の花瓶をもつ少女だった。

下着姿の少女は、ユストニア兵に乱暴された後だったのか、前だったのかは分からない。

ただ、この家の住人である事は分かった。

見かけからして十四、五の少女ではあるが、陶器の花瓶には血がつき、渾身の力を込めて殴った事だけはリオデにも分かった。

少女は暫く肩を激しく上下させながら息をしていた。

だが、時間がたつにつれ、落ち着きを取り戻していく。それに伴って腕は力を失っていき、最後には手からも握力が奪われたのか、花瓶を放して床に落とした。

花瓶は床に乾いた音を響かせて、リオデの足元に転がった。

リオデは呆然と少女を見つめていたが、男の呻き声で自分の置かれた状況に気付いた。

その場で立ち上がり、サーベルを拾い上げて男に止めを刺そうと、剣先を男に向ける。

「隊長！ 勝手に動かないでください！」

だが同時にベルシアが、慌てて部屋に入ってきてその行為を止める。

彼女は口惜しそうにベルシアを見たあと、サーベルを腰にしまう。

「すまない」

リオデは一言だけ謝ると、床に転がるシャツとパンツ姿のユストニア兵を家から出すように命令する。

その命令に従い、ベルシアは部下を数名呼び寄せ、敵兵士を運び出していった。

「もう大丈夫よ」

リオデは下着姿の少女にゆっくりと歩み寄り、肩に手を回して優しく言葉をかけた。

しかし、少女はその表情を変えることなく、呆然と立ち尽くしていた。

それも当然のことだろう。家族を皆殺しにされ、その上、それを実行した者に乱暴をされていたのだ。

リオデは質素なベッドの上にあるシーツをとり、少女の肩にやさしくかける。

それと同時に少女は彼女に顔を向けた。

その目は光を失い、どこに焦点が向けられているのか分からない。

「ごめん、ごめんね……」

リオデは自然とその言葉を口にしていった。

もう少し自分が早く来ていていれば、こんな事にはならなかったかもしれない。リオデはそう思うと、胸が張り裂けそうになる。

彼女はそつと少女の頭に手をのせて、綺麗な黒色の髪の毛をなでる。

それに対して、少女は初めて反応を見せた。

口をわなわなと震わせ、目からはすつと水滴が流れ落ちる。

そして、少女はその場に膝を床につけて、声を押し殺して泣き始めた。

まだ敵がここにいるかもしれないという恐怖が、少女からは抜け出していないのだ。

リオデはその少女を、齒を噛み締めながら強く抱きしめていた。

強く、強く、とにかく、強く抱きしめた。

第一章 決断の時？

？

「ここににいるユストニア兵を、全て生け捕りにしろ」
そうリオデは力強く言い放った。

村の惨状は凄惨を極めた。

四百人近くいた村人のうち、生き残った人々は七十あまり、それも少女や少年が目立っている。

ユストニア軍の一部隊の行いであるのは明らかだった。

だが、捕虜にした兵士はどれも階級の低い兵士ばかりで、指揮官クラス of 兵士はいない。

そのため、村に部隊を駐留させ、騎兵隊で追撃部隊を編成、先に逃げたと思われる指揮官を捕まえに向かわせたのだ。

「この村は、もうダメね」

村から出て行く騎兵隊を見つめながら、リオデはそつと呟いてうつむいた。

そして、村のはずれで穴掘りに従事させられる捕虜達に視線を向けた。

「この償いはしてもらう……」

無事、捕虜として生きながらえているユストニア兵の数も、二、三十人程度、高原の柔らかな土に穴を掘っている。

その他のユストニア兵は敵前逃亡、あるいは村の中で息絶えている。

「あの……」

グイの横に立つリオデに、小さな声がかかって彼女はその声のした方を向いた。

そこにはこの村の少女が立ち、くもりのない瞳で彼女を見つめていた。

リオデが顔を向けると一瞬表情を強張らせたが、すぐに表情を元に戻し、彼女を見つめ続ける。

「何か用でも？」

優しく答えるリオデに対して、少女は真剣な面持ちになり、リオデもまたそれに答えるように真直ぐな視線を送る。

「私をガイド役として連れて行って下さい」

少女の思いもかけない頼みに、リオデは戸惑いを隠せずに言う。

「い、いきなり何を言い出すのかと思えば……」

リオデはそう呟いたあと、少女をその真摯な目で見据える。

「私達がいつも戦いに勝つとは限らないのよ」

その言葉に怯むことなく、少女はリオデに対して真っ直ぐな視線を向けていた。

「一緒に連れて行ってください！ ガイドがいないのは知っているんです」

リオデはこの言葉に、頭を抱えなくなった。おそらくは兵士が「ガイドがいない」と愚痴をこぼしていたのを聞いたのだろう。

村に入る前に口止めをしておくべきであったと、後悔しつつリオデは少女を見つめる。

少女の目には真直ぐと、くもりな青い瞳が煌々と輝いていた。

その目を見て、リオデは少女を問いたです。

「あなたは、なぜ私達と行きたいというの？」

「私は……」

リオデの問いに答えようとするが、そう言っただけに少女は黙り込んでしまった。

「ユストニア人に対する復讐？」

リオデの一言に肩をびくりと震わせ、少女は地面を見つめて何も喋らなくなってしまった。リオデが言った一言は、少女の真意をついていた。

自分の村が破壊の限りを尽くされ、多くの家族同然であった村人を失ったのだ。

当然の気持ちである。

「私は少しでも、あいつらに復讐ができるなら……なんでも協力したい」

少女は「だから……」と語尾を弱めて言うと、今にも泣き出しそうになる。だが、目を潤ませるだけで、涙は流さなかった。

そこからも少女の決意の固さが窺えた。

（強い娘ね）

リオデは感心しつつも、突きつけられた現実を少女に容赦なく、突きつけることをあえて選んだ。

「私怨だけでね、あなたを選ぶわけにはいかないの。だから、あなたは連れてはいけない」

リオデの言葉に再び下を向いて、少女は何かを考え込んだ。

「それは分かっています。ガイドは少しでもその地に詳しいほうが危険が少なくて済むんですよ。だったら、私を連れて行ってください。幼い頃からずっと父に連れられて、この山で狩りをしてきましたから、ここらは私の庭の様なものなんです」

少女の言葉にまたしても、リオデは頭を抱えなくなる衝動に駆られる。

いまこの村は壊滅的被害をこうむり、男手は数少ない貴重な存在となっている。

そんな中から、ガイドを引き抜くのも、気の引けるものであり、頼みにくいものなのだ。

まして、ガイドは戦う前に予め用意しておくもの、軍の失態をこの村に押し付けるようで、とてもこの村からはガイドを取れるものではない。

だが、少女の方から名乗り出てきたのだ。それでなお、ガイドとしての資質は申し分ない。要するに断る理由がないのだ。

「まずは、今の村の責任者に聞かないといけないわ、それが筋とい

うものよ」

リオデは真剣な面持ちで少女に言って聞かせると、少女は相変わらずの表情を顔に浮かべていた。

「もう、許可は取っています……」

リオデは踏み出した足を止めて、少女を見つめた。

（抜け目のない娘ね……）

彼女はそう思わずにはいられなかった。それも仕方のない事だ。

「でも、私はその責任者に会う義務があるわ」

リオデはそういうと、村の責任者である村長のもとに足を向けた。幸いな事に、この村の村長は生き残っている。村に突入した後に、リオデは村長と面会し、お礼を言われているのだ。

その代わりに村に部隊を駐留させる事を取り付けた。村長はそれを快く受け入れてくれた。リオデは村の入り口に立つ、中年の男に話しかける。

それに反応し、男は顔を彼女のほうへゆっくりと向けた。

村長としては若い方だろう。初老を向かえる前に、村の長になるものは少ない。

「来ると思って待っていましたよ」

遠くを見つめる村長は、リオデ達が来た丘の方角を見つめ続けた。いた。

「そう言われるのでしたら、話は早いですね……」

リオデは後ろにいる少女を一度見た後、再び村長を見た。

彼はリオデに背を向けたまま、喋りだす。

「アリナのことですか、彼女のことなら気にせずに連れて行ってください。今村で一番こちらの地理に詳しいのは彼女ですから……。そして何より、彼女はそれを望んでいます」

リオデの希望しない答えに三度、頭を抱えなくなる衝動に駆られた。

彼女が予想していた返答とはいえ、一人の少女をガイドとして連れて行くのだ。

他の成人した男のガイドを付けてくれる。悪くて、ガイドなしの答えをリオデは望んでいたのだ。だが、彼女の願いも虚しく、少女の言うとおりに、少女をガイドとして付けろというのだ。

「しかし……。それでは私達は示しがつきません。我々軍の失態を貴方がたに押し付けているみたいじゃないですか。それに彼女は子ども、しかも女です」

反論されるのは本より覚悟の上で、リオデは村長にありつただけの意見を述べた。

「隊長さん、あなたは勘違いされておる。これは少女一人の意思だけではないのです。これは村全体の意思でもあるのです。それに先ほども述べましたが、地理に詳しい男達はもう残っておらんです」
彼は暗い表情を浮かべた後、リオデの方を真直ぐと見て、念を押すように言う。

「それに、あなたも女性ではありませんか……。アリナ一人を男共の中に渡すのではないのです。あなたのような美しい女性が側にいてくれるなら、アリナも安心です」

リオデは額に手をやって、地面を見つめた。

そして、今初めて、リオデは自分が女である事を心の底から恨んだ。

自分が女であるがために、少女の命を危険に曝してしまったようなものである。だが、リオデのなかに反論する言葉は、何一つとして見つからなかった。

暫く沈黙したあと、リオデは決心して、真剣な顔付きで村長を見て言う。

「分かりました。責任を持って、必ず村にお返しします」

その顔に女を感じさせるものはなく、一人の信念を持つ人間が立っていた事を、村長は感じ取って安堵の表情を浮かべていた。

リオデは渋々その申し入れを受け入れたことに変わりはないものの、自分の責任で少女を戦場に引き込んだことに、自責を感じずにはいられなかった。

「貴女なら、必ずこの戦いに勝つてくれましょう」

村長は安堵の表情を浮かべたまま、リオデを見つめ続けた。

「隊長！ 全ユストニア兵の確保、完了いたしました」

部下の一人がそうリオデに報告をしてくる。リオではいつになく険しい表情をして村長に向き直ると、胸に拳を当てる王国式の敬礼をして、その場を離れていった。

第一章 決断の時？

？

捕らえたユストニア兵の指揮官が口を割るのに、そう時間はかからなかった。

ユストニア軍の一小隊であるこの部隊の長は、この惨劇が上の命令ではない事を白状した。その上で自分を処刑する代わりに、部下だけは助けてくれと、懇願してきた。

だが、リオデもそれほど甘くはない。冷たく、冷酷な視線を送った後、その隊長を引き連れ、片付け終わっていない惨劇を目の当たりにさせた。

「これが同じ人間にする所業ですか？」

リオデはその部隊長を見ながら、惨劇の痕を見せ付け、そして、「観念しなさい」と付け加えた。

リオデは下をつつむいたままの指揮官を見ながら、考える。

（部下のやった事を黙認したのだから、全員処刑は当然……）

村人達の墓穴を掘るユストニア兵には、全員処刑の意はまだ伝えておらず、リオデは墓穴に村人達を葬ってから、伝えると隊長に伝えた。

その意にがつくりと肩を落とした部隊長は、小さな声で呟いた。

「慈悲という言葉もないのだな……」

それを聞き逃さなかったリオデは、部隊長を睨みつけて怒鳴った。「あなたはまだそんな事をいうのですか！？ 罪のない人を殺し、女を犯し、これ以上ない悲惨な事を起こしておいて」

感情の高ぶりを感じて、リオデは一呼吸おいた。しかし、そうそうこの怒りの感情がおさまることはなかった。

リオデはその惨状を目の当たりにして、悲しみを通り越して憤怒を感じていた。

「私はただ、部下に……」

「命令は出されていない。と聞いています」

リオデが遮るように言うと、部隊長は溜息をついて、その場に崩れ落ちた。

「人は間違いを犯す……。私の犯した間違いは最悪だったのかもしれない」

リオデはその言葉を聞き、呆れてものも言えなくなっていた。

この男がいまだになお、自分達のやった事が間違いでないと思う心があることに、あきれを通り越して絶望さえ覚えた。

「指揮官として、あなたは無能です……」

彼女は崩れ落ちる男に対して、容赦なく言い放ったのち、背を向けて家屋から出て行った。

胸の内に秘めたる思いを、この男に言ってもどうしようもない。

それが分かったリオデは、外に出て胸一杯に空気を吸い込んだ。

血の臭いが混じった空気は、高山の新鮮な空気を腐らせ、彼女に吐き気さえ感じさせた。

穴を掘り終えたユストニア兵達の近くに行けば、彼らの困惑する顔が見られた。

なんと言っても、墓穴のみならず、大きな穴を村から離れた場所に作らされたのだ。

困惑しないほうがおかしいだろう。

勘の良いユストニア兵は、その穴が何のために掘られたのか、察しがついたらしく、絶望と虚無感に襲われ、表情を硬直させている者もいる。

結局墓穴を掘り終えたのは夜が完全にふけてからだった。

そのあとの死んだ村人の埋葬は、村人自身の手と王国軍軍人の手によって行われた。

最後の死人を葬ったのは、夜明け近くになってからだ。

リオデは村人一人一人の墓を参り、無念と弔意の意を丁寧に伝える。

だが、それだけで、村人たちの怒りが収まるわけではない。

奇跡的に生き残っていた神父がいなければ、村人達の怒りを鎮められなかったのは明らかだ。

最後の墓を弔問し終えたりオデは、その場を立ち上がり、登りきった太陽に目を向けた

高原の朝日が憎らしいほど綺麗に輝き、リオデはその輝きに憎しみさえ感じた。

朝日を睨みつけるように目を細めて見ていたリオデは、後ろに控えていたにベルシアに対して、小さな声で一言だけ告げた。

「処刑の実行を……」

ベルシアはその言葉を耳にして無言で頷くと、その場を離れていた。

第一章 決断の時？

？

目隠しをされた兵士達が、大きな穴の手前で立たされている。

一列に整列した兵士達、彼らの表情は口元から読み取れた。

脅えて言葉をなくし、自分たちの行った行為を後悔する者、死を覚悟して表情を引き締める者、絶望しいつ死ぬかわからない恐怖に表情をゆがませる者、だが、彼らはこうなって当然の行為を行ったのだ。

リオデはその光景を、整列した銃兵隊の横に立って見つめていた。冷淡に同情などという生易しい感情を押し殺して、ただ、見つめていた。

村人達はそれを遠くから見つめ、さまざまな感情を胸のうちに秘めていた。

共通する感情は一つ、彼らユストニア兵に対しての憎しみである。銃兵隊を率いるベルシアがサーベルを抜いて、声高らかに叫ぶ。

「構え！」

その声に合わせて整列していた兵士たちは銃のチャンバーに弾を込め、長銃を前に突き出した。

無機質な長銃に弾を込める鉄の擦れる音は、青く広がった空と、雪で覆われた土地に響き渡り、最後のときが来たことを知らせた。

風が耳を触り、かすかな物音を立て、寂しげな歌を歌いながら高原を駆け抜けていく。

その静寂の中、目を隠された一人のユストニア兵が大きな声を上げた。

「我が祖国 時は来た 双頭の鷹を背に 剣を持て 汚れた血でその体を汚しながら 突き進め……」

とても綺麗とは言い切れない歌が高原に響き渡り、その歌は段々と音を上げていく。

となりにいた兵士もまた、声を震わせながら、歌いだし、そのとなりの者もまた口を合わせ始める。

一人また、一人と声を合わせ、ユストニア兵達は祖国の国歌を歌いだした。

風の音にあわせ、誇らしく、祖国の国歌を大声で叫ぶように歌いだし、いつしか大合唱となっていた。

銃を構える兵士達はその光景を目にし、動揺を隠しきれないでいた。

顔を見合わせ、合唱をする兵士達を見つめて、引き金から指を離す者も出てきたのだ。

それを見かねた指揮官は、サーベルを振り上げて、声を上げようとした。

だが、その振りあげられたサーベルに手をかけて、制止する人物がいた。

この部隊を指揮するリオデだった。

彼女は指揮官の行動に、手をかけてとめたのだ。指揮官は白く綺麗な手をみたあと、彼女の顔を見つめる。

リオデは顔を左右にゆっくりと振ると、それを見た指揮官も意図を理解したらしく、サーベルをゆっくりとおろした。

ひとしきり歌い終わった兵士達の顔に恐怖の二文字はどこかに消え去っていた。

それを見た銃兵隊の指揮官は、不快な表情を露にしてサーベルを振り上げた。

「撃て！」

号令が掛かり、一斉に並べられた銃口から硝煙と炎、鉛弾が放たれた。

高原に響き渡る発砲音は、風の歌をとめた。

罪のない村人達の命の灯火を消し去った者達は、大きく掘られた

墓穴に倒れ込んでいく。

処刑を実行した者達の胸の奥に、何かを残して……。

第一章 決断の時？（後書き）

どうもはじめまして、おはようございます。こんにちわ。こんばんは。

後書きなんてそんなに書いたことのない猿道忠之^{エンドウタダユキ}です。

以前よりかねてから書いていました戦記物を微妙に修正して、ここに初投稿させていただきました次第です。

もしかしたら、私のこの小説をほかでも見たことがあるという方がいるかどうか知りませんが、とりあえず、読んでいただき誠に感謝いたします。

戦争物を書きたいけど、架空戦記や現代物の戦争ものってのは、なぜか戦争物の本質である悲劇や戦況を強調しすぎたり、ただ単に兵器が大好きで兵器が目立ちすぎたりと、書くのがとても難しいジャンルであったりするんですね。

なおかつ、現代や史実を元にしていますから、史実の伝記を読んでいるとなぜか物足りなさを感じたり、こんなこと現代じゃおこらないだろうとを考えてしまって、物語そのものが妙にチープに見えたりするんです。おそらく、共感していただける方は少ないかなw

という訳でいつそのことから自分で世界を作っちゃって、政治やら国家関係やら使わない部分、見えないところまで作りこんで戦記物を書いちゃえばいいんじゃないかな？

とふと思ったんですね。

そうして出来上がった作品が今回のこの『戦場の鎮魂歌』なわけです。

史実や現代の舞台を元にした戦記物っていうのは、正直、現実感があるようで実は全くなくて、感情移入しやすいようで、実は滅茶苦茶感情移入しにくいんですよ。って言うのは、僕個人の意見でしてまあ、とにかく、異世界にしてしまえば、上記したような違和感を取り払えるということに気づいた僕はこうやって戦記物たる戦争物ファンタジーを書き上げました。

戦争物ということと物議をかますこともあるかもしれませんが、基本的に思想信条は個々の自由であり、この作品に対してどのような気持ちをもたれるかは、この作品を開いて読んでいただいた読者様次第です。

こんなふうに堅苦しく書いちゃいましたけど、結局の所ファンタジイ的な戦記物なんで、脚色が強くなっていました、淡々とかつ生々しく戦況が進んでいく本物を経験した人が書いた伝記には敵うわけありません。

ですから、今後もそれはちょっと脚色強くな？っていう部分が多々出てくると思いますけど、そこはご愛嬌でお願いします。（笑）

*追記

章構成を変更させていただきました。

ページ表示の負担軽減のため、第一章の？、？、？という形にさせていただきました。

今後、第二章、第三章、第四章と続く予定です。

ではでは、批評、酷評や感想、誤字指摘をしていただけたら、とてもうれしく思います。駄文ではありますが、目を通していただけた方に、感謝の言葉を送らせていただきます。

本当にありがとうございます。

では、続きを改変しつつ、今後とも精進して書いていきたい
と思います。

第二章 補給戦線？

雪の降り積もった高原に茶色い地表を露にした道が、雪原を二つに切り裂くようにして続いている。その上を幾人もの兵士たちが隊列をなして行軍していた。

どの兵士たちにも憔悴の色が見られ、物資を輸送している鳥車が列をなしてその横を通り過ぎていった。漆黒の羽毛に覆われている恐鳥たちは力強い脚力で、荷車を引きながら雪道を歩いていく。黄色く鋭い嘴を前に突き出して、兵士たちを見下ろしながら道を延々と進んでいた。

「俺たちはこの戦いで生き残れるのかな？」

物資を運ぶ鳥車の手綱を握っている兵士が、隣に座っている同僚に聞いた。

「心配するな。開戦から4ヶ月近く経っているのに、ユストニア軍の本隊がバスニア砦に現れたって報告がないんだ。やつらもそうとうに消耗しているさ」

それをきいた兵士は手綱を強く握り締める。

「駐屯地にいた基地長がバスニア砦に兵力を移すっていうのは、砦で決戦が近いからじゃないのか？」

「馬鹿言え。念のために戦力を全て砦に移動させてるだけだ」

鳥車の上で不吉な言い合いをする兵士二人、空の表情も心なしに雲で陰り出していた。

ユストニア大公国がグイディシユ王国の豊富な鉄鋼資源を狙って、このレルジアント地方に侵攻してから四ヶ月が経とうとしていた。

高原地帯を下りたところにある街「タリボン」の攻略部隊を撃破したグイディシユ王国軍は、主力部隊を集めて高原地帯手前にあるラネス平原を決戦の地として選んだ。新たに中央方面軍より派遣された王国の近衛師団もこれに加わり、ユストニア軍に決戦を挑んだ。ユストニア軍の延びきった補給線では、十分な装備と食料が届か

ない。だが、体勢を立て直せば、いくらかの勝機はあった。そのため、ラネス平原に主力部隊を集結させていた。それを見越していた王国軍はユストニア軍が充分に準備を整える前に、ラネス平原に殺到し、ユストニア軍の反攻の出鼻をくじいた。

そのため、ユストニア軍は当初のレルジアント地方全域の占領という作戦目標を変更し、鉱脈のある高原地帯の確保という作戦方針に転換していた。

この四ヶ月の間にタリボンを抑えてレルジアント各地に軍を展開することが不可能となったユストニア軍には、この作戦変更は当然の行為であった。

だが、ユストニア軍はスピードを重視していた作戦を遂行していたため、道の交差点にある主要都市しか占領していなかった。そのため、主要道路の外れにある中小規模の街、村、基地、砦には手出しをしていない。

ラネス平原で大敗北したユストニア軍にとっては、高原地帯を勢力下に置くことは急を要することで、王国軍からの反攻作戦を迎え撃つことができる唯一残された作戦である。

そのため、高原地帯の中小規模の軍基地を巡って熾烈な戦いが繰り広げられていた。

タリボン方面の南側高原に位置しているバスニア砦は、開戦当初、ユストニア軍が戦略的価値なしと見ていたため、いまだに攻撃にはさらされていない。

「物資と兵糧、兵員の移動に一ヶ月かかって、ついに俺たちが最後か。駐屯基地が空になったってのもなんだかおかしい話だなあ」

曇りだした空を見上げながら、兵士は荷車を引く恐鳥のグイに鞭を入れた。この先にあるバスニア砦にむかって、鳥車は速度を上げて走り出す。鳥車に乗った兵士達は実戦を経験していない。とはいえ、休みなしに砦と駐屯地を往復してきた兵士たちは、さすがに憔悴の色を隠せずにいた。もし、この状況でユストニア軍に会敵すれば、王国軍の兵士達の運命は目に見えている。

「まあな。さつさとこの戦争が終わってくれば、気が楽なんだけどな」

横に居た兵士も冷たい風を肌を感じながら、そう呟いていた。

まるで他人事の様に、あたかも自らは戦闘に加わっていないと言いたげに、呟いていた。

「おい、砦が見えてきたぞ」

暫く無言のまま二人は鳥車を走らせていたが、はるか遠くにそびえる城砦が見えてきていたことを、手綱を握る兵士は指を差して隣の兵士に知らせていた。

「さて、なんだ？ 砦から煙が上がっているぞ」

はるか遠くにそびえる城砦、いつもならば何事もなく城砦が彼らを迎えてくれるのだが、今日は違った。

青空の下、穏やかな顔を見せていた城砦は、遠くから見てもわかるほど黒い煙で表情を曇らせている。

「おいおい、まじかよ。敵さんが来ちまってるじゃないか」

兵士は手綱を引いてから鳥車をとめて、はるか向こうで繰り広げられる城砦の攻防を、ただ呆然と見つめていた。

「逃げるぞ！」

横に居た兵士がささず手綱を持っている兵士をせかす。

「一体どこに逃げるんだ？ 俺たちの駐屯地は空で、行く予定だった城砦はすでにユストニア軍の攻勢にさらされてるんだ。今更どこに逃げても、敵兵だらけに決まってる」

その言葉を聞いた兵士はうな垂れるように肩を落として、溜息をついていた。自分たちだけはこの戦いに参加せずにすむ。補給部隊に入ったのもそのためだ。

兵士は心の中で呟きを繰り返す。

しかし、はるか遠くで繰り広げられている戦闘行為は、現実を物語っていた。

「じゃあ、お前にはどこか当てがあるってのか？」

兵士は八つ当たりをするように、手綱を握る兵士を肘で小突いた。

だが、明確な返事が返ってくることはない。突きつけられた現実、二人とも動揺をしているのだ。舌打ちをしてから、兵士は手綱を握る兵士に言って聞かせる。

「確か俺たち補給部隊には二個小隊の歩兵が護衛についていたはずだ。とりあえず、部隊を全て合流させよう。このまま城砦に向かつても無駄死にして、敵に物資を垂れ流すだけになるからな」

その言葉を聞いた兵士は、無言で来た道を引き返し始めた。彼らの後ろには数十の鳥車が続いている。引き返し始めた先頭の鳥車に続いて、まるで蟻の行列のように、鳥車たちは道を引き返すのだった。

枯れ草を燃やした時にでる煙のような灰色の雲が、空一面を覆っている。空は今にも雪が降り出しそうな雰囲気で包まれていた。

太陽が隠れば肌を刺すような寒さが、この高原地帯を支配する。だが、その中をこの高地に住む人間は平然と暮らしている。リオデは村人と入れ替わりに入ってきた、同じ連隊に所属している大隊を出迎えていた。

彼女たちの所属する第六近衛師団は、二個旅団から編成されている。一個旅団は二個連隊からなり、そのうちの一つの連隊の指揮下にリオデの大隊は所属している。連隊も二個大隊から構成されていて、リオデ達が足場にした村に一個大隊と、彼女の指揮下の一個中隊が駐留することになった。もちろんこの村の人間は全て高地から避難して、平地にある街のタリボンに向かった。

リオデ達の大隊はこの村に入る前に、分岐していた道で戦力を二つに分散させているため、今は中隊規模での行動しか取れていないとはいえ、この村を占拠していたユストニア軍歩兵一個小隊を撃破した功績を残している。彼女の部隊は実戦を経験して、着実に成長していた。

「隊長、フオリオン連隊長との作戦会議がこの後控えているのとこのです」

村人たちの墓標の前で弔意を捧げていたリオデの後ろに、彼女の補佐役のベルシアが立っていた。気配を感じなかったリオデは、驚いて後ろを振り向いていた。

「わかった。すぐ向かうと伝えてくれ」

リオデの返事を聞いたベルシアは、一礼してからその場をあとにした。

彼女はそれを見送ると再び墓標の前でしゃがみこむ。

時間がなかったため、木の板に名前を書いただけの質素な墓標、それでも墓標があるだけましなほうだ。戦場では墓標さえ立てられず、身元もわからないまま総合墓地に弔われる者が大半なのだ。

（すまない。私をもっと早くに駆けつけていれば……）

結果は変わっていたかもしれない。

リオデは村人の墓標一つ一つを丁寧に戻って、弔意を捧げていく。この村はユストニア軍の歩兵隊に占領され、略奪の限りを尽くされた。それでなお、村人達は一方的な虐待、強姦、殺人行為という暴力を振るわれた。

そうなる前に駆けつけてやれなかったことを、リオデは愁い後悔して自らを責め立てていた。リオデがその心情を他人に話したことはない。それでも、部下のベルシアは彼女の様子から、彼女の苦悩を察していた。だからこそ、ベルシアは墓標の前で弔意を捧げているリオデに、気を使って余計なことを言わずにその場から立ち去っていった。

墓標に弔意を捧げ終わると、リオデは即座に立ち上がって村の家屋が集中している方角へと足早々と向かう。

（この戦い、すでに私のものだけではない……）

リオデの顔からは誰かを愁う気持ちは読み取ることはいできない。それどころか、何か強い決意を胸に秘めた、凜とした表情をしていた。

山道を挟むようにして並びひしめく家屋たちは、主を失ってどことなく寂しげにしている。その中で多くの兵士たちが休息を取っていた。

リオデはそんな家屋の中で、一際大きな建物の前まで向かっている。そこで同連隊の大隊長ホフマンと、連隊長のフォリオンと会うことになっているのだ。

リオデが連隊本部として機能している建物に入った時には、すでに多くの作戦関係者が揃っていた。

彼女が入ってきたのを見て、ホフマン大隊の人間の間で、ざわめきが起こっていた。たいていリオデが作戦会議上に来るとこのような声が上がる。内容は女性ゆえに起こる、僻みと侮蔑の言葉である。その様子を見かねたフォリオンが一つ咳払いをすると、ざわめきも瞬く間に静まり返る。二つの大隊を取り仕切っている連隊長のフォリオンには、それだけの発言力があるのだ。

「さて諸君、我々が立たされている状況だが、ラネスの戦いで勝利したとはいえ、いまだ戦況は油断を許さない状況である」

そう言ってフォリオンは顎に生やした髭をさすっていた。そして、息を吞んで見守る士官たちを見回した後、続けた。

「このレルジアントのガルス山脈のユストニア軍掃討に、南西方面からは第七近衛師団、南東方面からは我が第六近衛師団が尖兵として送られた。両軍の当面の目標は我が領内にのさばる敵の駆逐、掃討、撃滅、追撃である。そのため、ユストニア軍を効果的に殲滅する必要がある。そして作戦遂行を潤滑に行うには地元部隊と合流が必要不可欠となる」

連隊長のフォリオンは簡単に現状を説明していく。リオデの大隊が村を確保した後に、ティオから報告が来ていた。行軍していたティオの中隊は、ユストニア軍の部隊と出くわして、戦闘状態に陥っていた。今でこそ、その戦闘は膠着しているものの、もし、増援を受けたユストニア軍が攻撃をかけてくれば、ティオ中隊の全滅もありえるのだ。もし、ティオの部隊が全滅すれば、この村はタリボン

に向かう退路を絶たれてしまう。現状は決して芳しくはない。

二日前にはリオデが出した斥候が、村から東方向に数千人名規模のユストニア軍兵士の移動を確認している。それが、バスニア砦に向かっていることは明らかだった。だが、今彼女が指揮している部隊の数は千名程度で、なおかつ、味方大隊の到着を待たなければならなかった。それゆえに、敵勢力圏内での行動は、斥候にしても無闇な追跡行動などは取れなかった。

「大部隊を前に、震えて俺たちを待ってただけつてのかよ」

ホフマン大隊の一将校が、そう言ってリオデを嘲るような目で見ていた。数千名規模の大部隊を前にしておきながら、むざむざと見過ごしたたことを、責め立てているのだ。

リオデの部下、ベルシアはその男の一言に憤慨して、立ち上がって言葉を発していた。

「我が隊の現在の任務は敵の大部隊に察知されずに安全な拠点を確保することです。わざわざその作戦行動を放棄して、拠点も確保せずに、むざむざと敵に立ち向かって全滅しろとでもいうのですか？

だいいち、あなた方の行軍が二日遅れたことによって、見過ごさねばならない事態に陥ったのですよ？」

リオデ達の大隊は敵に感知されず拠点を確保することが第一に優先すべき任務だった。それゆえこの村に駐留していたユストニア軍歩兵小隊を一人も逃がさずに全て捕らえて処刑した。さらに、敵部隊の接近がないか、周辺の索敵も怠らず、常に気を配って斥候部隊を出していたのだ。そして、彼女は敵を見つけても攻撃をせずに見過ごして、発見されることがないよう、斥候部隊には命令を徹底していた。

それほど、気を使って拠点の確保をしていたリオデたちからしてみると、苦勞も知らないホフマン大隊の一将校にけなされることは、とても堪えられるものではなかった。

なにより、リオデ達が拠点確保に精を尽くしているときに、彼女の大隊の報告書を信用しなかったホフマン大隊は行軍を渋っていた

のだ。

そのせいで、敵大部隊の移動を見過ごすはめになったのだ。ベルシアの反論に言葉を返せず、憎々しげにリオデに視線を送る将校、その目には明らかな輕蔑意識が見て取れた。

「味方同士で争っても仕方あるまい。双方の隊の失態が消えるわけではない」

ホフマンがそう言って二人をなだめ、場の空気を和らげる。しかし、さりげなくリオデにも失態があるということを強調していた。ベルシアが抗議の声をあげようとした時に、リオデが言葉を発していた。

「そうだな。今はそのような不毛な議論をしているときではない」
リオデの意外な言葉に、ベルシアは不満げに席についていた。一応の収まりを見せた会議場を見回して、フォリオン連隊長が再び口を開いた。

「ホフマンとリオデの言うとおり、味方同士で僻みあっているのは、ユストニア軍を駆逐することなどできんだろう。双方とも頭を冷やせ」

ベルシアは不満そうにリオデを見るが、彼女は首を振ってから抑えるように示す。

「さて、本題に入ろう。我が第一連隊がこのレルジアントの最東の道を抑え、この先にあるバスニア砦までを我が軍の勢力圏に置くというのが現在の我が隊に託された任務である。しかしながら、バスニア砦が敵勢力圏に陥落していないとは言いい切れない」

フォリオンはそう言って、作戦会議の机の上に置かれている地図上のバスニア砦を指し示していた。そのあと、渋めの顔をして説明を続けた。

「そこで、リオデ大隊長、君の中隊で威力偵察を敢行し、状況を確認してきてほしい。ついでに、我が連隊の最終任務である第1112山岳歩兵師団との合流のための情報も収拾してきてくれるとありがたい」

フォリオンは両手を顔の前で組み、鋭い視線でリオデを見据える。有無を言わせない威圧感とそれにそぐわない包容感、両方を出して言っていた。

リオデにとつて未開の地であるこの高原を、中隊を率いて偵察行為をすることなど、無謀である以外に何でもなかった。それもこれも、全て彼女を潰すために仕組まれているのではないかと、ベルシアは思わざるをえなかった。

これまで王国では女性兵士はいても、女性士官はまったく見られなかった。リオデはそんな中、流星のごとくこの戦地で才能を目覚めさせ、女性士官として活躍していた。

それを僻む身内も多く、彼女を潰そうとする將軍さえいる。ユストニア軍のみならず、彼女は身内の敵とも戦ってきているのだ。とはいえ、どちらにしてもフォリオンの提案した偵察任務を、誰かが果たさなければならぬ。

それでも、ベルシアは納得がいかなかった。村に後から来たホフマン大隊が、この村を確保して、リオデ達がこの作戦に借り出されるのは、不公平と感じたのだ。

そんなベルシアをよそに、リオデはフォリオンに向き直って、凜とした口調で言う。

「この大命、果たして見せます！」

曇りない眼で真っ直ぐとフォリオンを捕らえ、はっきりと断言していた。そのリオデの目に何か大きな決意がみなぎっていたのを、フォリオンは見逃さなかった。

それから数刻の時が過ぎ、作戦会議は真夜中まで続いた。リオデたち指揮官が連隊本部より出てきた時には、真っ黒い雲が夜空を覆っていた。

外に出た指揮官たちの肌を切り裂くような冷たい風が、容赦なく吹きつけていた。

「こいつはいっちょ、荒れそうですね」

ベルシアがリオデと共に外に出ると、そう言って彼女を見つめる。

「そうだな」

そう言ってリオデは風でなびく、艶のある長い紅い髪の毛を手でどけていた。

そして、彼女は夜空を見上げながら言う。

「ベルシア、この戦いどうすれば早く終わると思う？」

軽く受け流された上に唐突な質問をされ、ベルシアは戸惑った。それでも彼は、自分なりの答えを見つけて口にしていた。

「ユストニア軍を追い出すしかないでしょう」

「だが、相手はいたるところに、部隊を拡散させて配置している」

リオデは厳しい表情で、ベルシアを見つめていた。その表情にベルシアは、不覚なことに胸を高鳴らせた。だが、それでも、真剣に答えていた。

「しらみつぶしに拠点を潰していく。地道ですが道はそれしかないです」

ベルシアは思ったままのことを口にした。拠点を制圧して敵を無力化していくしか方法はない。この広大な高原地帯では、岩を隔ててその向こうに敵がいるという状況だ。一歩間違えれば気づかないうちに、大部隊が後方にいるという惨事が起こりかねないのだ。

だが、活動拠点を潰されればユストニア軍は撤退を余儀なくされる。ユストニア軍もそれを重々承知しているので、重要拠点の防備は堅固なものになっている。とくに最前線に近いこの周辺域の拠点は、堅固な守りをしている。

「一刻も早く、もっと効率的に、ユストニア軍を撤退させられる方法はないか？」

リオデは切なげな表情を浮かべ、ベルシアに聞いていた。彼は言葉詰まらせる。

「それは……。自分はなんにも思いつきませんよ。せいぜい思いついても、そのくらいで」

苦笑を浮かべるベルシアに、リオデもまた苦笑を浮かべていた。「すまない。変なことを聞いたな。私達の任務はあくまで、偵察と

情報収集だ」

彼女はそう言い、苦笑を浮かべたまま付け加えた。

「今の会話は忘れてくれ」

ベルシアは無言で頷いて見せると、雪の降り積もった道に足を踏み出した。

心なしかその足取りが、ベルシアには重く感じられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7427y/>

戦場の鎮魂歌

2011年11月24日21時49分発行